看取りについてのトピックス

「看取りの作法」という言葉にひかれて，記事に注目しました（週刊医学界新聞，3301 号，2018.12.10)。日下部明彦先生（横浜市立大学総合診療医学教室）にインタビューした内容が紹介されています。タイトルは，「医学生・研修医のうちに知っておきたい『看取りの作法』」です。

病院に比べて，在宅での看取りでは，医師が家族に与える影響が大きく，特に初対面の家族の前でどのようにふるまうかは，医師にとって難しいことだと述べています。

そこで，日下部先生は「地域の多職種でつくった『死亡診断時の医師の立ち居振る舞い』についてのガイドブック」をつくられ，医学教育に活用されているそうです。この名前を検索すると，WEB 上からでも拝見することができます。

その中で，家族が死亡診断時に必要と考えたことの調査結果が紹介されています。いくらか表現を変えていますが，列挙します。

- よく知らない医師が死亡診断を行うときにも医師が概ねの経過を知っている（看護師の役割として，事前に要領よく報告しておくこと，が考えられます）
- おちついた雰囲気である（看護師も同様だと思います）
- よく知らない医師の場合は自己紹介がある（看護師も同様であり，看護師から「今日は〇〇先生が急用のために，△△先生に来ていただきました」と紹介するのも家族に安心していただけると思います。）
- 家族への説明を丁寧にする
- 身だしなみが整っている
- 死亡診断書の文字が丁寧である
- 患者や家族へのねぎらいの言葉をかける

インタビューの最後に，形式よりも大事なこととして，最期まで患者を尊重して丁寧な診療を心がけること，遺族の心情に敏感になることを挙げています。

これらは，訪問看護師にとっても参考になることであり，共感しましたのでご紹介しました。

徳島県訪問看護ステーション連絡協議会会長　多田敏子